

新著紹介

印度佛教思想史

橋 惠 勝著

「佛教心理の研究」著者橋惠勝氏今又約七百頁に垂んとする大著「印度佛教思想史」を公にせらる、誠に慶賀に堪えない、「佛教の思想史に就きては大藏經なるものがあつて」、一の體系を組織する史料が「比較的によく蒐集されてある」、然るにその藏經を「高閣に束ねて蠹魚の蝕するまゝに委して學術的に整理せんとする人のなきこと」を「無念」とし、「難行苦行」の十五年の日子を費し、「支那に於ける教判といふ見方を離れ」「専ら内在的批判によりて公正を保ち、「組織的な解説的叙述をなす場合にも可成は故の型と離れぬように、そして容易に理解せらるゝようにと注意し」、「歴史的發展を見る上には専ら内在批判によりて、學說の真相を自己の私見にて上下する様な獨斷を避ける事に注意して」本書は公にされたのである。

學者々々その佛教史の解説に於て時に西人研究の結果によるものがある、それ元より善し、併し西人の説必ずしも正しいとは言へない、西人の佛教を研究する多くは材料を我れに採る、その中には我れ誤れるに依りて彼れ誤るものも尠少でない、吾人は須く我が材料によりて我れ自らの研究を遂げその根柢を作らなければならぬ、わが材料とは何ぞ、最も手近きものは大藏經である、併し大藏經の研究これ元來容易な業ではない、然るに著者橋氏永く

この大藏經研究に全力を捧げ、その結果として今その蘊蓄を發表せらる、實にわが學界の慶事と言はなければならぬ、今その目次を見るに

序説——印度文明の溯源。二、權力思想の發達。三、過渡思想の概觀。四、外國文化の影響。本論——一、釋尊の立教。二、聖典に就きて。三、傳統に就きて。一（部執派生の時代）十四、大衆部。五、阿育王の布教。六、目犍連帝須。七、犍子部。八、說一切有部。九、化地部。十、法藏部及び迦葉維部。十一、制多山部。十二、經量部。十三、法勝。十四、龍軍。一（綜合運動の時代）——十五、大乘經の出現。十六、大集經。十七、華嚴經。十八、般若經。十九、龍樹。二十、提婆。二十一、馬鳴。二十二、僧伽羅刹。二十三、大毘婆沙。二十四、訶梨跋摩。二十五、妙法蓮華經。二十六、楞伽阿跋多羅寶經。二十七、大般泥洹經。二十八、勝鬘經。二十九、無著。三十、世親。三一、陳那。三十二、護法。三十三、結論。

思想史研究の要素として著者がその序説に於て佛教興起の背景を明かにせんとしたるが如き、又、佛教思想發展の徑路を示すために佛教術語を顧慮し多くの挿註を載せられたのが如き、又、卷末に六〇頁を費して索引を附せられたるが如き、皆著者苦心の存する所として之を見なければならぬ。

余が本書通讀の際得たる所感の總てを敘述する事は餘りに煩に過ぐるから、今その中一二の事項に就て述べて見る事とする。

著者の佛教思想史組織の態度が單に經論の主觀的觀察に傾かず種々客觀的史料を顧慮し涉獵したものである事は明かに認むる所

であるが、併し往々大なる割斷に走りて、讀者を迷はし、苦慮せしむるものが尠からずあると思ふ。例へば(一)「本文の内在的批判から、その進行を初めたる出發點を定位して思想の發展したる跡跡を辿れば、自ら歴史の過程が現はれてくるものである」といふ著者の態度は可なりとするも、「新ビタゴラスの盟社が、アレキサンドリアに於て最も隆盛なりしは西紀前二世紀にして、この思潮がナルマダ河に近き海邊に押寄せて、影響したる新現象が、文殊菩薩等の菩薩にて代表せらるゝ、大乘運動が現はれたるものである」と論ずるのは(三〇二—三頁)果して如何であらうか。(二)

たとへば外來思想の影響ありと許しても、大集經を以て大集經最終の經典にして「グジヤラトからラジプタナへかけたる地方にて」成立したるものとするが如き(三一八頁)、又、「道德生活を離れて信仰生活のあることを認めないといふことは、發心の初めに、如來の道德を目的とする思想としては當然のことである」として、華嚴經を以て大集經に次ぎ五河地方に於て出現したるものなりとせるが如き(三一九頁—二四一頁)、一應新説奇論として之を見る事を得べきも若し著者の言葉を假する事が許さるゝならば、より多く適確なる史料のない限り、學術上よりしては畢竟「大膽なる臆斷」に過ぎないと言ひ得ないであらうか。又、著者は楞伽阿跋多羅寶經を以て錫蘭島にて成立したる經典であると述べられて居るが(四六九頁)、若し果して然らば現在の漢譯及び梵本の原本が錫蘭語より翻譯又は重譯されたものであるといふ史料が尠くともなくてはならぬ、それが何處にあるか、この重大にして根本的なる問題を全く顧慮せず、又その史料を示さずして、輕々にかく

論じ去りたる著者は、當然割斷の譏を甘受せねばなるまい。内在大の批判も畢竟程度の問題ではなからうか。

次に本書に對する希望の一二を述べて見る。(一)印度佛教史上重大なる位置を占むる智度論に就いては著者は全然論ずる所がない、六品般若の注釋として唯一度その名を出されたに過ぎない、それが龍樹の作であるが否かは問はずとしても、論そのものとして少しは論及せらるべき性質のものであると思ふ、之は嘗て著者が「智佛教」誌上龍樹の作にあらずとしてその研究の結果を發表せられた爲めであらうとは思ふが、それにしても何等か一言本書に於いて注せらるべきであつた、殊に智度論に對する著者の見解を知るを得ば本書閱讀者の便宜決して尠少ではなからうと思ふ。(二)著者が思想史組織の一要素として地理を重大視せられたことはいふが、併しその記載せられたる多くの地名が果して何れの方角に存するかを示すべき一の附圖すら添へられてないといふ事は本書として一大欠點であると思ふ。(三)次に原語の挿入であるが必要なる所に欠け、不必要と思はるゝ所に屢々挿入せられ、しかもそれが屢誤つて居るといふ事は體裁の上から言つても、今少しは注意せねばならぬと思ふ。(四)誤植の多い事は亦本書の缺點である、勿論自然的な誤植は止むを得ないとしても、兎に角本書に於ける如く十を以て數ふべき誤植の如きは、事枚末の問題にわたると雖も、しかも本書の如き學究的著書關係者の大に心をなげばならぬ點であると思ふ、勿論卷末に正誤表が二頁添へられてあるが、それは極めて一部分のもので、しかもその僅か二頁の正誤表の中に於て既に十餘の誤植あるに於て余は驚かざるを得なかつ

たのである。

本書は要するに各經各論各部各論師の思想をそれ／＼殆ど獨立に心理的觀察を興へて解剖紹介せられたものであつて、寧ろ印度佛教思想に關係ある史料個々の解題として見るべく、各思想史料それ自らの内容如何を窺はんとするものにとりては參考になると思ふが、併し組織されたる思想史としての豫期の效果は本書に於て之を認むるに躊躇せざるを得ないと思ふ、兎に角本書を讀んで、先づ感ずる所を忌憚なく言ふ事が許さるゝならば各史料に對する公正なる客觀的考察の不足と、出版の不用意と、大膽にして曖昧なる臆斷とがその缺點であらう。といふ事である。東京大同館發行、定價參圓參拾錢、(本田義英)

民本主義と國民教育

橋本文 著

デモクラシーと言ふ言葉は近頃、廣く一般に用ゐられて居る流行語である事は言ふまでもない。デモクラシーと言へば夫れ丈でもう何だか意味がわかつた様な氣持がする程、耳に慣れてゐる。而し果してどう言ふ思想を表はしのかと聞かれ、ば一寸困る人が多からう。又この言葉が多くの人々の間にもてはやさるゝ其の反面には、我國傳來の思想と非常にかげ離れた否全く正反對な思想であるかの様に思はれて、従つてデモクラシーと言へば一種危險思想の様に見做す傾向が一方に存する事も争はれない様である。

民主とか民本とか言へば君主とか君本とかと矛盾する様に感ぜらるゝのが事實とすれば、先づデモクラシーの意義を明かにして、我が國體との關係を判明に説く事が、徒らにこの言葉に隨喜した

り、又は徒らに危險視する事よりも、望ましいことであると思はれる。本書はそう言ふ意味から見て、正に生るべくして生れたものである。且つ著者が現に國民教育の實際に携はつて居ると言ふ事から、著者其の人も亦得たりと言へよう。

(一) 民本主義とは何ぞや、(二) 民主主義に對して、(三) 民本主義と政治、(四) 民本主義と倫理、(五) 民本主義と教育、(六) 君民一本主義、(七) 君民一本主義と家族制度、(八) 君民一本主義と學校教育、(九) 君民一本主義と社會問題、等に大別して前、後約二百頁に渡つて縷々説いて居る所は、結局リ・カンがデモクラシーを定義して、人民の爲めに、人民に據る人民の政治 *the Government of the people by the people for the people* と言つたのを、我國に於ては、人民の爲めに、人民に據る大君の政治 *(the Government of the Empire by the people the people)* と改正すべき所以と、我が國民道德の理想として君民一本主義を唱道すべき理由の闡明であり、是れが眞にデモクラシーを我が國民化した主義であり、この理法を國民に徹底せしむる事が國民教育上重大な意義を有すると言ふ事を、力説して居る。叙述簡にして要を得、頗る眞面目な著述である。(寶文館發行、定價壹圓貳拾錢、深田武)

心理叢書 第十一冊 ウィリアム・ジェームズ及び其思想

文學士 小憲虎之助著

學に志す者が獨創の見解を色々の問題について發表し得ると言ふ事は斷かに痛快な事であり且つ望ましい事であるが餘り性急に